

巻 頭 言

丸山 英二（神戸大学）

本誌「北海道生命倫理研究」はこのたび第4号の発刊を迎えることができた。2015年度は、高齢者医療・地域医療特集号も発行した。また、北海道生命倫理研究会の活動は、日本生命倫理学会ニューズレター No.58 においても報告された。

本号ではまず、研究倫理の分野を代表する執筆者による、適正な「倫理審査」のあり方についての考察がなされている。「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に即して、重要な審査内容をもれなくカバーし、効率的な順序で審査を行う手順を示したものである。続いて、宗教学を専門分野とする執筆者による論考が収められている。現代の死生学における二つの動向であるスピリチュアル・ケアとナラティブ・アプローチの親和性を見出し、それらを接合することにより、宗教教義の押しつけを避けるという示唆に富む試みがなされている。

研究報告では、脳の機能を改変する「ニューロエンハンスメント」の倫理的問題を明確にするためにドイツでの脳神経倫理学における論点が整理され、新たな生命倫理の概念的枠組の再構成が示唆される。また、住民のニーズに応える、保健医療福祉専門職が組織・運営するコミュニティ・カフェ活動の意義について検討される。

本研究会は毎年2回セミナーを開催しているが、2015年度冬期は公開セミナーという初の試みがあった。テーマは「老いとともに生きる社会」で、高齢者医療・福祉の問題に取り組んだ。「地域包括システム」、「独居高齢者問題」に関する報告とともに、地域医療の現場に長年にわたり従事された留萌市立病院名誉院長による基調講演があった。本号では、今後の地域医療には大学との連携が不可欠と説く、この基調講演の内容が収録されている。

本誌では毎回「学会レポート」が掲載されているが、専門家による日本医事法学会総会、日本医学哲学倫理学会大会の報告に加えて、本号では日本生命倫理学会年次大会に参加した医学部生による報告も載せられている。将来医療の現場に就く学生の目線から、専門家の発表がどのように映ったのかが興味深い。また、近年、医療安全の重要性の声が高まっています。これを踏まえ、医療の質安全学会学術集会の参加報告も収められている。

研究活動への参加者が若干固定化の傾向にある。やはり、研究会の活動にふさわしく、北海道を中心として内外からより多彩な参加者を得ることも、研究会発展の重要な課題であろう。本誌を手にした皆さまには、是非とも北海道での生命倫理研究に関心を向けていただきたいと切に願いますところである。

2016年3月